日本医史学雑誌　第55巻第3号（2009）　371–376

石龍子と相学提要

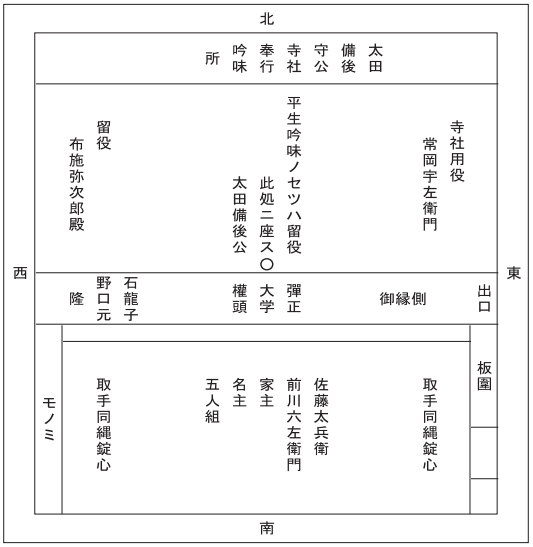
中山　茂春

医療法人社団緑風会　水戸病院

受付：平成21年5月28日／受理：平成21年6月7日

第5代石龍子は日本における性相学の始祖であり観相学の泰斗である．明治42年頃から大正末期までの12年間は全国に石龍子ブームができる程日本的な名声を得た．石家は江戸時代，正徳4年（1714年）に初代石龍子が江戸芝三島町（明治時代の町名で芝区三島町11番地，現在の東京都港区芝大門1丁目）に居を構え，江戸で医業の傍ら観相学を始めている．第2代石龍子は長崎で蘭医を学び東都（江戸）で一番の観相家と評されている．第3代石龍子の時代に，観相学が医学の範疇なのか陰陽学の範疇なのかの裁判が行われている．安永8年（1779年）9月12日に始まり安永9年（1800年）3月23日に判決があり，その記録が残っている．この時代は陰陽学の名の下に京都の土御門家がこれを監督し，人の運命の吉凶禍福を占う術に従事しようとする者は土御門家の免許を受けなければ営業を許されぬ事になっていた．しかし石龍子は，その免許を得ずに江戸で医業の傍ら観相学を行ったので訴えられたのである．裁判は時の老中列座評議の上，松平右京大夫公の御下札を以て，寺社奉行太田備後守に仰せ付けられて裁判が行われた．判決は町医師の石龍子はお構い無し，著書は医書に相違なし，以後発売は勝手．吉村権頭（土御門家の関東総奉行）は押籠30日，役儀取り離し，流浪とある．観相学は医学の範疇と認められたのである．

石家は代々石龍子を名乗り観相学の家として昭和の時代まで続いた．その中で日本的に有名となった第5代石龍子は養子である．筑後久留米藩医中山家の分家に当たる儒学者中山泰橘の次男中山時三郎が第4代石龍子の次女貞（中山家の戸籍では貞，石龍子家の戸籍では〈さた〉となっている）の婿養子になっている．石家と岩家（岩邑家，岩村家）と中山家は旧来からの縁続きの間柄で，お互いの家が絶えようとする時はお互いに養子をやって家を存続させると言う約束事があったと言い伝えられている．中山時三郎は文久2年（1862年）9月10日生まれ，筑後久留米の田舎から東京に出て慶応義塾に明治14年9月20日に入塾している．これは中山家の姻戚に当たる久留米藩医松下元芳（大阪の緒方洪庵の適塾で福沢諭吉の1代前の塾頭をした医師，福沢諭吉の先輩であり親友でもあり，福翁自伝の中〈緒方の塾風〉に出てくる）の影響が大きいと考えられる．慶応義塾を卒



圖の洲白時決判日三十二月三年九永安
（観相学大意、石龍子著より）

図1　「白洲の図」

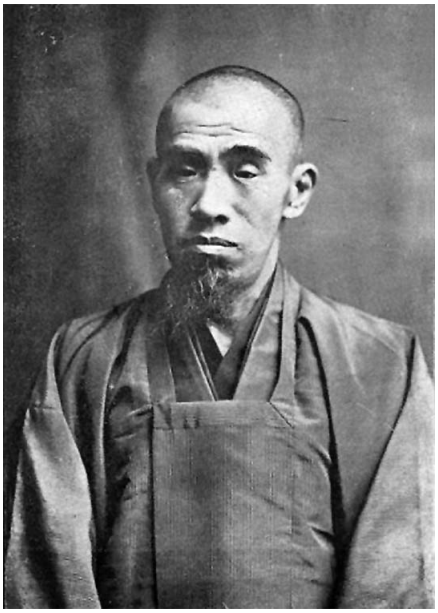


写真1　第5代石龍子（幼名　中山時三郎）
（文久2年（1862）9月6日生，昭和2年（1927）9月20日没　享年65歳）

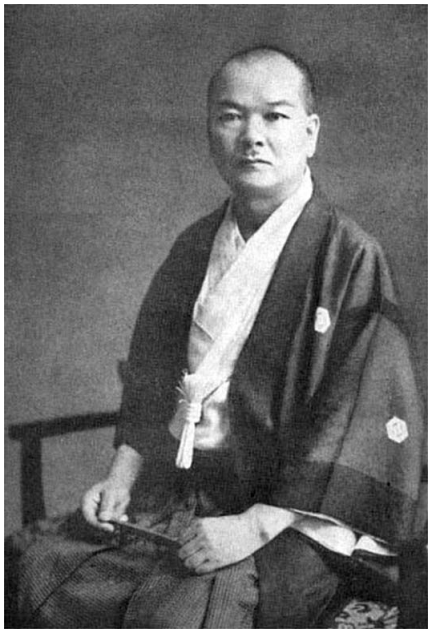


写真2　第6代石龍子（幼名　仁科嘉六）
（明治13年5月26日生，昭和37年1月10日没　享年82歳）

石　龍子の系図

初代
石　龍子
医師、観相学者。正徳四年（一七一四年）江戸芝三島町に居を構える。

第二代
石　龍子
相明。医師、観相学者。長崎で蘭医を学ぶ。東部（江戸）で一番の観相家と評される。

第三代
石　龍子
相栄。医師、観相学者。「神相全編正義」「相方心神論」「相栄発揮」等著す。安永九年（一八〇〇年）に観相学は医学の範疇とする裁判（江戸幕府の裁定）に土御門家に勝訴。

第四代
石　龍子
医師、観相学者。二女の名は石家の戸籍には「さた」、中山家の戸籍には「貞」とある。
貞は万延元年（一八六〇年）一月二十六日生昭和十五年一月十三日没、享年八十歳。

第五代
石　龍子
観相学者。性相学の始祖。明治四十二年頃から大正末期まで全国に石龍子ブームができる程、日本的な名声を得た。
実は筑後久留米の儒学者中山泰橘の次男中山時三郎。第四代石龍子の二女貞の婿養子。
文久二年（一八六二年）九月十日生、昭和二年（一九二七年）九月二十日没、享年六十五歳。

第六代
石　龍子
観相学者。「観相学大意」「顔は性格と運命を語る。」等著す。実は静岡県田方郡下狩野村の仁科嘉七の二男仁科嘉六。
明治十三年五月二十六日生、昭和三十七年一月十日没、享年八十二歳。
妻は北多摩群西府村四ツ谷の市川藤朗の二女フミ。フミは明治二十二年九月四日生、昭和四十九年七月十九日没、享年八十五歳。

仁（長男）　明治四十五年三月五日生、昭和十六年六月一日没
逮治（二男）　大正二年六月三日生
嘉孝（三男）　大正四年一月二十八日生、昭和二十六年五月十四日没
嘉輝（四男）　大正八年十月二十六日生
昌子（二女）　大正十二年四月二十八日生、昭和十三年一月二十六日没
嘉子（三女）　大正十四年十一月十九日生
篤子（四女）　昭和五年〇月二十日生、竹田千蔵と婚姻
孝子（養女）　大正三年四月二十三日生（実は仁科清作の四女）

「付記」石家と筑後久留米の中山家、岩邑（岩村）家は親族であり、お互いの家が絶えようとする時は養子を出し合って家を継ぐという約束があったと言い伝えられているが、その血統は第五代（幼名中山時三郎）で絶え、第六代石龍子は他家からの養子である。

図2　石家の系図

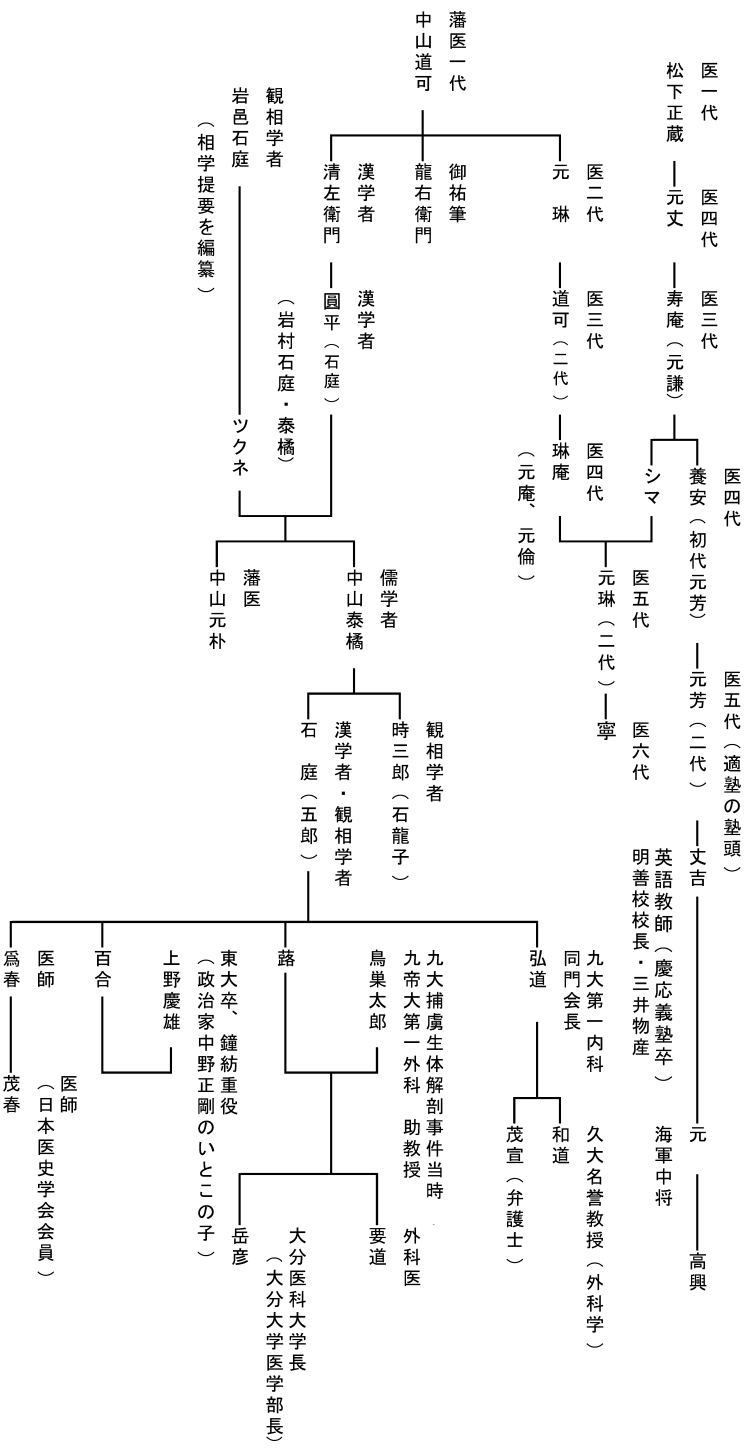


図 3　岩邑石庭と久留米藩医中山家と松下家の関係略系図

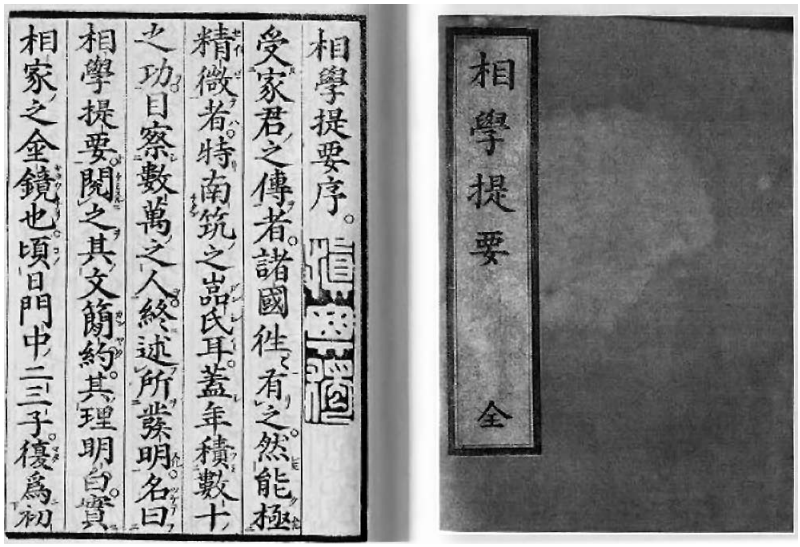

相學提要序。
受家君之傳者。諸國往〻有之。然能極
精微者。特南筑之岩氏耳。蓋年積數十
之功。目察數萬之人。終述所業明。名曰
相學提要。閲之其文簡約。其理明白。實
相家之金鏡也。頃日門中二三子。復爲初
相學提要
全

写真3　「相学提要」

写真4　岩邑石庭の墓

（岩邑石庭翁源一興之墓は久留米市隈山の市有地の墓所にある）

業して帰郷後は明善中学校の英語教師をしている．因みに松下元芳の長男松下丈吉は明治9年5月1日に慶応義塾に入塾，卒業して同じく明善中学校の英語教師をして，校長になっている．中山時三郎は明治25年6月13日に第4代石龍子の次女貞の婿養子になっている．

久留米の歴史書の多くに，儒学者中山泰橘に関しては，家は代々紫琳臺と称して漢学と相学で有名であったと記載があるが，紫琳臺（漢学，相学の塾の名称）とは中山泰橘の母の里に当たる岩邑家（岩村家）の事である，岩邑家が絶えたので紫琳臺を継いだのである．久留米藩医中山家の直系は十軒屋敷，現在の久留米市日吉町にあり，どちらかと言えば城に近い場所である．紫琳臺は八軒屋であり，城から一里（約4キロメートル）程離れている．岩邑家には代々伝わる「相学提要」があり，中山時三郎もこれを学んでいる．「相学提要」は中山泰橘の母方の祖父に当たる岩邑石庭が文化10年（1813年）に編纂している．その中の病相を筑後久留米藩で最初に人体解剖をした医師酒井義篤（通称を元貞，諱名を義篤，号を天来）が担当している．又本の完成に当たっては東都（江戸）の石孝安が撰すとある．医師の酒井義篤は「相学提要」に携わって9年後の文政9年（1822年）に筑後久留米藩で初めての人体解剖を行っている．酒井は黒岩十右衛門を助手に門弟，同士ら数十人の前で解剖を行い「解体図志」を作成している．

山脇東洋が小杉玄適らと日本で最初に人体解剖をした宝暦4年（1754年）から68年後．杉田玄白，前野良沢らが江戸小塚原で腑分けに立ち会った明

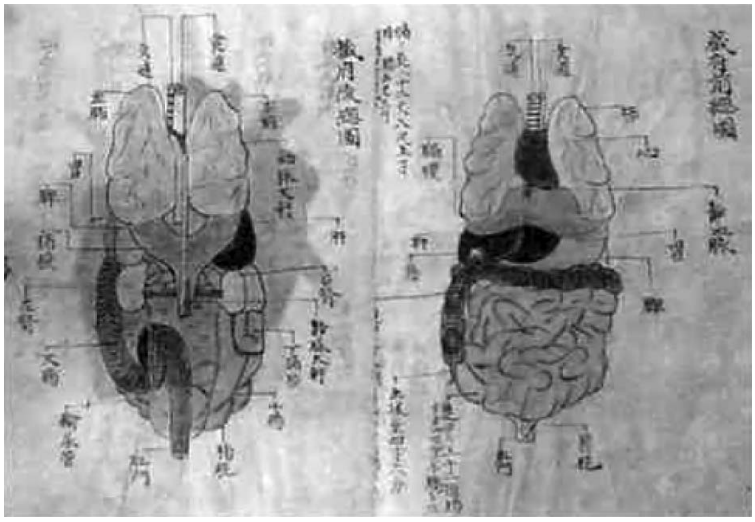


写真 5　「解体図志」

酒井義篤が筑後久留米藩で最初に解剖（文政 5 年（1822））を行い，解体図志を作成．（福岡県医蹟マップ（日本医史学会福岡地方会製作，2003 年）より）

写真 6　酒井義篤の墓（筑後市尾島）

和 8 年（1771 年）から 51 年後，解体新書が完成した安永 3 年（1774 年）から 48 年後であった．酒井が久留米藩で初めて解剖を行った背景には「相学提要」の病相に携わった事が大きく影響していると思われる．此処に石龍子家の系図，緒方洪庵の適塾の塾頭をした松下元芳と中山家，岩邑家（岩村家）の関係系図と共に相学提要の紹介をいたします．

〈付記〉

（1）観相学，性相学，骨相学の用語について．広辞苑では観相学は諸種の精神能力は大脳の各部分に宿り，それらの能力の発達の程度は，頭蓋骨の形貌から推測される大脳各部分の発達の程度によって知り得るとする説．骨相学．とあります．性相学は人相・骨相・手相など，人の肉体上に現れた特性から，その性質や運命を判断する学術とあります．石龍子が作成した観相学に関する著書の中では観相学・性相学・骨相学の英語訳は phrenology となっています．一般書店に置いてある英和辞典では phrenology は骨相学とだけ和訳があります．観相学，性相学，骨相学は同義語と解釈されます．その内容は，人の容貌骨格を観て，病気を含め性格や運命を判断する学問であり，医学における視診に該当するが，より広く深いもの，と考えられます．今後の国語辞典，英語辞典を作成される際の参考になればと思います．

（2）「解体図志」（酒井義篤作成）の作成年の訂正．2003 年の日本医学会総会（於，福岡）の際に

日本医史学会が同時に開催されました．その際に福岡県医蹟マップを作成しましたがその中の解体図志の作成年が天保元年（1830年）とあるのは間違いです．本文中の文政5年（1822年）が正しいものです．此処にお詫びして訂正したします．

文献

1）岩邑石庭（編著）「相学提要」文化10年（1813年）筑後久留米　紫琳臺製作（久留米市民図書館所蔵）
2）石龍子（著）「観相学大意」東京　誠文堂新光社　昭和10年（1935年）
3）「先人の面影」福岡県久留米市　久留米市役所編集・発行　昭和36年（1961年）
4）篠原正一（著）「久留米人物誌」福岡県久留米市　菊竹金文堂　昭和56年（1981年）
5）「故郷の花」（第22号）福岡県小郡市　小郡市郷土史研究会発行　平成9年（1997年）